宗像大社 沖津宮

日本の九州と朝鮮半島との間の海峡に位置する沖ノ島は、日本の歴史において独特な位置を占めています。沖ノ島は聖地として、そしてアジア大陸との中継地として、日本固有の宗教・神道の発展や、古代における日本と外の世界との交流について多くのことを教えてくれます。

古代の遺物

二十世紀の考古学者らは、この小さく起伏の多い島が、**1,500** 年前まで遡ることが出来る品々の宝庫であることを発見しました。沖ノ島と出土品は非常によく保存されていましたが、その理由の **1** つは、一般の人々が島内に立ち入ることを制限し、一切の物、小石や小枝でさえ持ち出すことを禁止する厳しい禁忌にあります。この優れた保存状態と何世紀にもわたる儀式の発展により、沖ノ島と関連遺産群は **2017** 年に世界遺産に指定されました。

島の保全

厳格なルールは現在でも守られており、沖ノ島への入島を許可されているのは、宗像大社の神職だけです。交代制で **10** 日間にわたり隔離状態で生活します。境内の整備や宗像三女神の一柱・田心姫神といった、ここに祀られている神のために古くからの祭祀を行います。

信仰と貿易

7 世紀から (宗像大社の最後の宮司・宗像氏貞が男系の跡継ぎを残さずに没した)**1586** 年まで九州の宗像地方を治めていた宗像氏は、遅くとも **4** 世紀には沖ノ島を信仰の地として確立していたと考えられています。大和朝廷(**300-710** 年)は、原生林や劇的な岩の露出や崖など、沖ノ島の自然環境に宿る神々に航海の加護を求め、貴重な奉獻品を捧げていきました。この慣習は **500** 年間続きました。この頃には現代にも続いている様な、より形式的な信仰様式に発展し、社殿に神々を祀りました。